

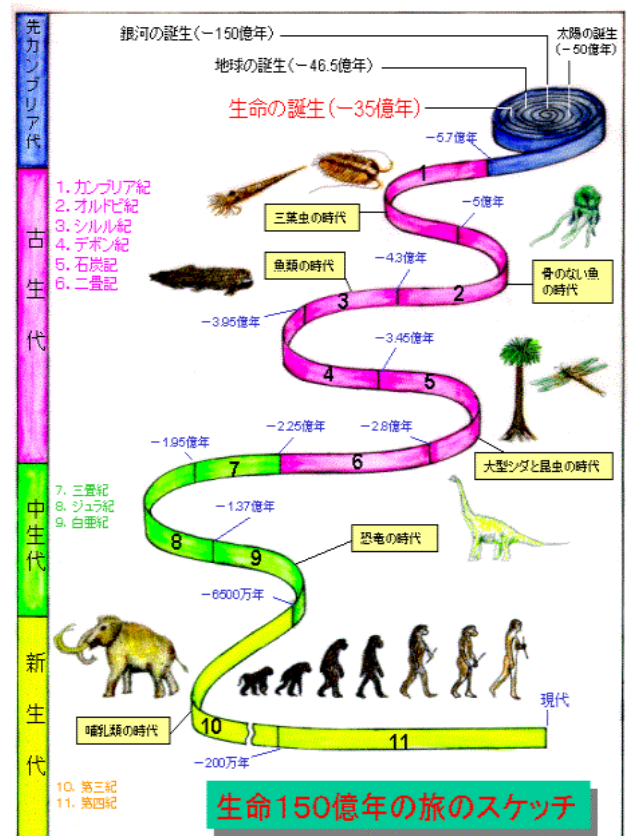
いのちと憲法九条

「憲法九条」は、「人間の理解を可能」にした自然科学と、そのもとで「生命の尊厳を確立」しようとする社会科学の統一の成果として存在している。これを超える「条項」は将来にわたって存在しない。「憲法九条」を世界の憲法にしようとする世界的支援が高まりつつあるとき、われわれも日本においてその改悪を阻止する運動の最前線を構築しなければならない。「憲法九条は絶対的な条項であり、それを守り育てることが人類の平和を展望できる」が「公理」であるとする議論を納得するためには、生物の進化から人類の誕生の過程を通じて人間を正しく理解することである。そして、そのもとでの科学的な生命観（＝人間の見方）が生まれ、それによって初めて憲法九条が輝きを放ち、人間を互いに慈しむ人間愛が醸成され、生命の尊厳が確立できる。ここでは、生命の見方から憲法九条の意味を考えてみたい。

1. 人間は皆おなじ

有史以来、それぞれの差別的立場から人間は相対的に見なされ、一方の人間を他方の人間によって抹殺してきたが、人間の平和を探求する上においては、お互いの意見や立場を超えて人間の命を絶対視する見方（＝価値観の構築）が必要である。それを「絶対的生命観」という。「絶対的生命観」は、人間が共通の祖先から進化してきたという科学的認識のもとで、他者を自己の身体の外延と捉え、人間を単純なものや数値に安易に抽象化することを拒否する「価値観」であり、如何なる価値観もこれを超えてはならない。この価値観の構築には、「生物の進化」、とりわけ「ヒトの起原」の理解が必須である。そこで、「ヒトの単元（原）的進化」を知り、人間の単一のルーツを確認することができる。現在65億人の人口を擁しているが、皆同一のルーツであり差別峻別されるべき人は誰一人として存在しないことがわかる。これが、人間の自然科学的理解である。この原点の確認がなければ、つまり人間存在の絶対的な基盤が確認されなければ、人間の相互発展への展望はもてない。

人間が絶対的な存在であることをあらゆる角度から学び、自然のつくりの絶対的な基盤に立つ自然科学の成果を、社会科学や人文科学が巧みに取り入れ、人間の平和な未来を構築する知恵、それこそが日本国憲法九条なのである。1950年当時のエネルギー消費を維持すれば、人類はおよそ1,000年程度生きることができるであろうから、その寿命を全うするためには速やかに憲法九条を世界の憲法にしなければならない。

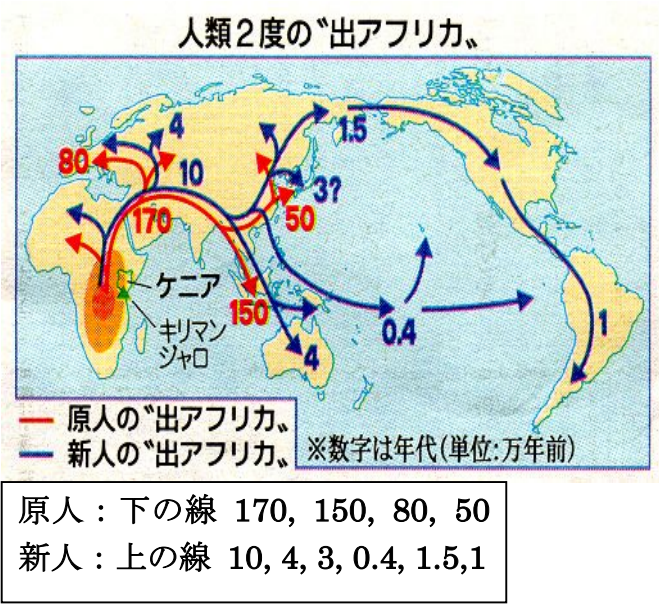
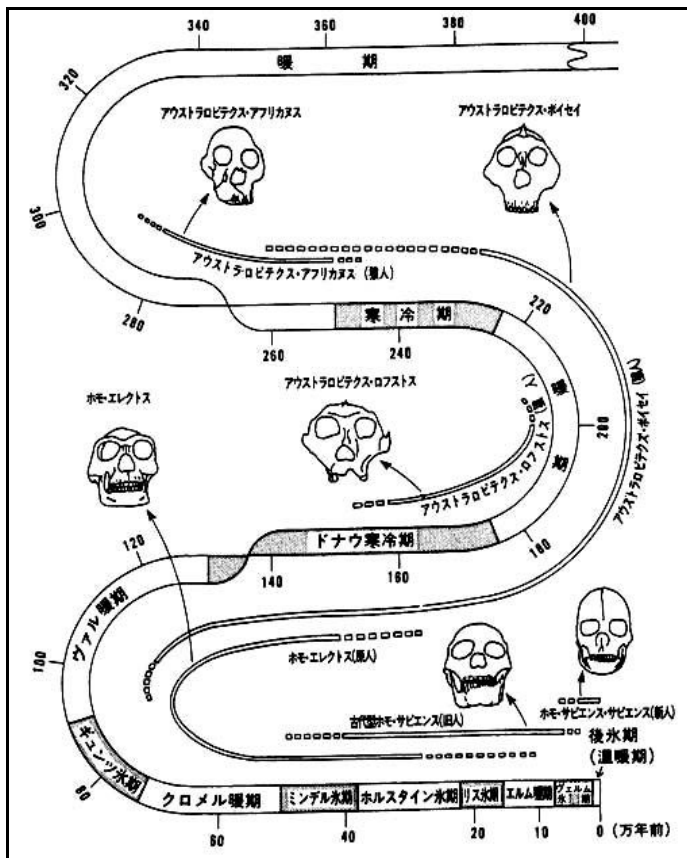


2. 人間のルーツは1つ＜生物の進化と人類の誕生＞

地球史は、無機界から有機界、無生物界から生物界、生物界の進化、そしてヒトの誕生から人間への進化に向

けて、物質界の発展の歴史<図「生命 150 億年の旅のスケッチ」>と見ることができる。全ての生物はこの進化の「帯」の上を歩んできたのである。物質性、歴史性と発展性、全ての生物に平等をもたらす共有性、全てが無限の発展性を有すると同時に必ず終焉がある有限性を全ての生物の特徴としている。

今日発見されている最古の猿人は、アフリカ・チャドに約 700 万年前に棲息していたと考えられる（サヘラントロプス・チャデンシス）。これは、ゴリラやチンパンジーより人類に近いものとなっている。ヒトの祖先となる生物は、およそ 500 万年以前にチンパンジーと共通の祖先から分かれたと考えられていたが、その先祖型類人猿かもしれない。これらの猿人は、繰り返される寒冷期と温暖期に遅しく進化し、より発達した猿人になった。約 380 万年前から 100 万年前まで棲息したと思われる猿人は、アウストラロピテクス属で、東アフリカ地溝帯においてのみその化石が発見されている<図「人類の進化」>。これまでに知られているヒト科に属し、人類の方向へ進化する猿人としては最も古いものと考えられている。ここでは平均をとって、約 250 万年前をこの属の誕生としておく。一番古い種アファレンシス（約 380 万年前から 100 万年間）、その次の年代の 2 種（アフリカヌスとボイセイ）、いずれも猿人で、前者が 300 万年前から 50 万年間、後者が長くて 260 万年前から 160 万年間棲息した証拠が報告されている。これらの猿人は、脳容積が原人より小さく顔つきも猿のようであったといわれている。ここでは、猿人の化石は全てアフリカのみで発見されていることに注目しておく。



人類の進化

原人、ホモ・エレクトス（直立のヒトの意味）は、約 160 万年前から 20 万年前までの人類であった。北京原人やジャワ原人などもこの属に入る。頭蓋骨のつくりも相当人類的になってきており、道具の使用も本格的になってきた<図「人類の二度の“出アフリカ”」>。

古代型ホモ・サピエンス（旧人）は、約 40 万年前から 4 万年前まで棲息していた。ネアンデルタール人は旧人で、学名はホモ・サピエンス・ネアンデルターレンシスといい、ホモ・サピエンスであるが、脳容積などの点でまだ新人ではないということで、亜種とされている。しかし、頭蓋骨のつくりはかなり進化していた。

新人は外見上現代人と変わらないもので、この新人は、約4万年前から登場した「本当に知恵のあるヒト」の意味で、学名はホモ・サピエンス・サピエンスという。

新人は、歴史上ではつい先刻登場したことになる。人類の分類は、霊長目、真猿類亜目、ヒト上科、ヒト科、ヒト属、ヒトのヒト、ということになる。ヒトの脳容積が大きく猿との決定的な違いがある。しかし、大切なことは、脳容積が勝手に大きくなった生物がヒトではなく、脳容積を大きくし選択されたのがヒトなのである。つまり、ホモ・エレクトスの時代から、足を発達させ、自由になった手は道具をつくり利用するようになった。その結果として脳が発達してきたわけである。生物が二足歩行をして手の働きを発達させない限り、絶対に脳の発達には保証されなかった。手足を動かし、顎をよく動かしてよく噛み、言葉をよく喋ることなど脳の活性化にとって大切であり、文化と文明を獲得する基本である。

旧人にせよ、新人にせよ、「単一種」としてアフリカで誕生し世界に展開をしてきた生物である。今日では、生棲場所や肌の色などにおいて種々の違いがあるが、人間はどの地域のどの人たちとの間でも子孫をつくることのできる「単一種」である。皆同じである。だから、＜出アフリカ＞に見るように、子孫を増やしながらい世界に展開できたのである。そして今日、65億人の同種の同胞が全世界に住んでいる。科学的[生物学的(自然科学的)]には、人間の間にはなんら相違がないことが証明される。相違をつくっているのは、人間の集団が「物事を適当に決めて」その場の都合で、人為的につくっていることになる。したがって、人間のつくったことは人間の工夫で解決ができる。その工夫こそが人間の叡智である。19世紀の優れた進化学者、A・ウォーレスは、人間は「人間が進化の過程で獲得した最高傑作は、弱いもの、不自由なもの、劣ったものを不利益から守ろうとする叡智を備えた生物である。」と言っている。地球上に生きる生物の中で人間のみが持つこの特徴を遺憾なく発揮することが、地球を支配している人間の使命である。殺し合いを止めて人間として、生物進化の華を咲かすときである。憲法九条の真骨頂を示すときである。

3. 人間の命に差をつけるとく最大の環境破壊である戦争はやめろ！>

「生物の進化」から全ての生物が環境を共有していることを学び、「人類の進化」から現在の65億人のルーツが1つであることを学ぶことができる。ルーツを同じくするのであるから、人間の平和を構築する上においては、お互いの意見や立場を超えて、人間を絶対視する価値観である「絶対的生命観」を行動の規範とすることが必要である。

先ず、人間を恣意的に差別することを目的とした戦争の否定である。戦争のための準備である「軍事費」について、世界170カ国と地域で見よう。軍事費は各国の防衛のためのものであり、特定不特定の「敵」を攻撃するモノではないとする意見や、抑止力行使の目的に存在していると説明もされる。しかし、今日のように技術が発達した時代に、手をこまねいて自国の防衛のみを考えることは画餅である。防衛するなら先制攻撃以外の方法はないのである。つまり、軍隊を持つことは、戦争をするためである。戦争には、平和な戦争や綺麗な戦争、あるいは知識人の言う「正義に戦争」など決して存在するのではなく、無差別の殺戮を目的とする国家や地域をベースとする職業的殺し屋集団(テロ)のみである。国連や日本の政府もしばしば言及するが、「平和のための戦争」(peace-keeping operation)が、あたかも人間の平和に貢献しているように言うが、これは人間を相対化するエセ論理の延長線上のものであり、そこには殺す連中と殺される連中がいることを忘れてはならない。殺される連中の立場を理解することが平和の構築に必須である。

余談であるが、「愛の鞭」という言葉がある。この言葉の下に、如何に恣意的暴力が横行しているか考えたことがあるだろうか？これは、先の「平和のための戦争」の小型で、偽善の「愛」の名のもとに行われる真の暴力である。つまり、「平和≠戦争」であるように、「愛≠鞭」なのである。後者を認めない連中は必ず前者を否定する(逆もまた真なり)。

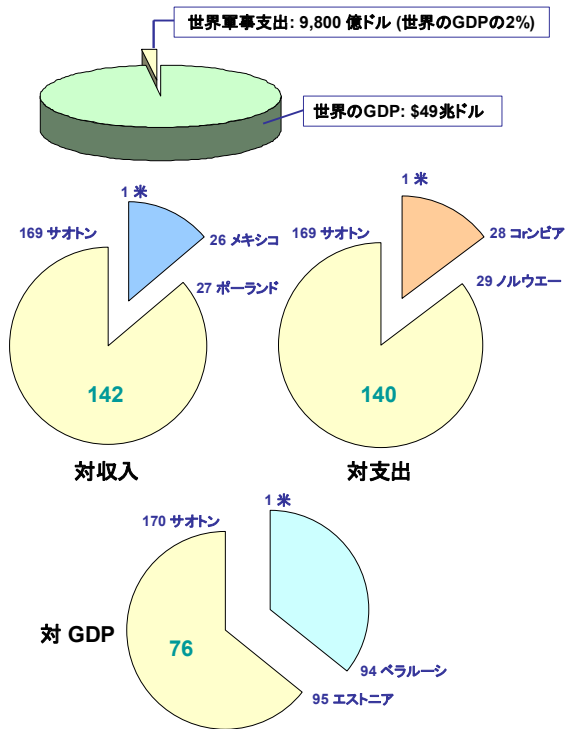
世界の軍事費はおおよそ9,800億ドル(2002年)で、GDP(49兆億ドル)の約2%である。これを、それぞれの

国の対収入、支出、GDPで見ると（左図）、収入では142カ国分、支出では140カ国分、GDPでは76カ国分となる。つまり、軍隊を維持するために、あるいは他国や民族を威嚇や殺傷するために、上記のような結果になっているのである。本来人民の平和と安寧のために使われるべき国家予算が、毎年、76カ国のGDPに相当する費用として「どぶ」に捨てられていることになる。戦争を維持することが費用の面においても如何に無駄なことかがよくわかる。

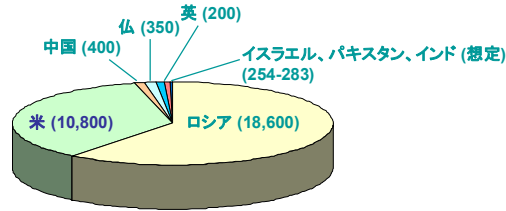
われわれの脅威はこれだけではない。強大軍事国ではその費用のかなりの部分を核兵器の開発に使用している（右図）。2002年の世界の核兵器の状況が示されているが、削減が進められてきたとはいえ、地球上の全人類を何回も殺戮して余りあるものである。全核兵器の速やかな廃絶を求める運動をますます強めなければならない。

ストックホルム国際平和研究所（SIPRI）が、2006年5月7日公表した年鑑では、世界の軍事費の合計が6年連続で増え、ソ連崩壊後初めて1兆ドル（約110兆円＝日本の国家予算の1.4倍）を超えたとしている。最大の要因は米国の軍事費増で、米軍事費は全世界合計の47%を占めるとしている。同年鑑によると、2004年の世界の軍事費合計は前年度比6%増で、米ソ冷戦期の最高値（1987-1988）より6%少ないものの、「冷戦最中の水準に再び近づきつつある」と警告している。年鑑は、世界の軍事費増は「米国とその軍事同盟国の海外での軍事活動が主な要因」と指摘している。日本も、憲法九条をアメリカの圧力で改悪し、米国の同盟軍として行動しようとしている。米国の軍事費は、アフガニスタン、イラクでの「対テロ戦争」（2002-2004年）で急増。昨年は前年比12%増で4,550億ドルに達しており、この額は、2位から33位までの32カ国の軍事費の合計に匹敵しておる。「財政赤字と将来の経済成長に対して軍事費が及ぼす影響について疑問が出されている」と述べられているが、将にその通りである。人類が平和に生きるための財源の確保の第一が「ここ」にメスをいれることである。ちなみに、軍事支出の上位五カ国は、米国、英国、フランス、日本、中国。この五カ国で世界の三分の二を占めている。

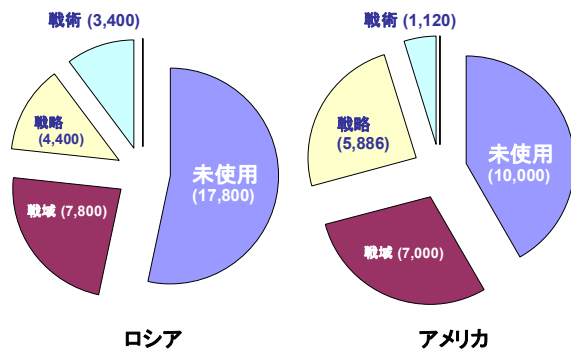
世界170カ国・地域の軍事支出(対GDPと年間予算)



約30,000個の核弾頭の保有(2002年)



ロシアとアメリカの核弾頭保有(2004年)



昨年5月、核不拡散条約（NPT）再検討会議（1970年に発効したNPT条約事項を点検する会議：条約前文には「・・・核兵器の製造を停止し、貯蔵された全ての核兵器を廃棄することを『希望』する」と述べている）が開催されたが、これらを契機に世界の核廃絶の運動に呼応していくことである。

また、殺戮のための学校や大学、研究や教育、武器の製造と販売など、一連の平和を構築する流れに逆行するものに対して、人間の命の大切さを訴えながら憲法九条を守ることによって封じ込めていかなければならない。

4. われわれの役割<生命の尊厳を確立する平和な社会建設>

今日までの軍事力を背景とする力による支配から、全ての紛争を話し合いで解決する方向がこれからのあり方である。殺し合いを続けることでは、本質的な解決が絶無であったことは歴史の示すところである。人間の命の絶対的な基盤を理解し、話し合いの方向に、確信と、ロマンと夢をもって臨むことによって、平和に生存する政策を国民化することである。

戦争における犠牲者は想像を絶するものがある。第一次大戦においては853万人、第二次大戦では3,544万人の死者が報告されている。そこで、第二次大戦後設立された国連では、その憲章において戦争を否定した。日本においてもこれを受けて、軍隊を完全に放棄することによって、世界平和に貢献するという世界に例を見ない憲法を制定し、そして平和の使者である後継者養成のために教育基本法を制定した。これは、21世紀における世界平和の構築において範となるものである。

しかし、従来から憲法を蹂躪しながら世界最強の軍隊を築きあげ、世界に展開できる力をつけてきた。しかし、憲法の枠を超えて堂々と行動することはできなかった。このことが、今日の日本の平和と安寧に、そして経済的発展に大いに貢献してきた。これは世界に誇るべきこととして評価し、これからも維持していかなければならない。ところが、憲法の枠を超えることができなければ、日米軍事同盟に基づく世界侵略に、さらには、日本独自の世界経済侵略に支障を来す。そこで政府は、戦争することのできる法体系の整備をアメリカの強力な圧力の下にすすめ、「憲法改悪」と、将来の戦争要員確保に向けて「教育基本法改悪」を目論んでいる。

21世紀は、戦争の続いた時代を超えて、平和の世紀にしなければならない。1955年7月9日、戦争と核兵器の廃絶を求めるラッセル・アインシュタイン宣言では、「私たちの大部分は感情的には中立ではない。しかし人類として、私たちは次のことを銘記しなければならない。すなわち、もし東西間の問題が誰にでも・・・可能な満足を与えうるような何らかの仕方で解決されなくてはならないとすれば、これらの問題は戦争によって解決されてはならない。私たちは東側においても西側においても、このことが理解されることを望む。私たちの前には、もし私たちがそれを選ぶならば、幸福と知識と知恵の絶えない進歩がある。私たちの争いを忘れることができぬからといって、その代わりに、私たちは死を選ぶのであろうか？ 私たちは、人類として、人類に向かって訴える一あなたがたの人間性を心にとどめ、そしてその他のことを忘れよ、と。もしそれができるならば、道は新しい樂園へ向かって開けている。もしできないならば、あなたがたの前には全面的な死の危険が横たわっている。」と述べている。つまり、戦争ではなにも生まれてこないから、あらゆる紛争問題の解決のための平和的な手段を見出す以外に方法はないことを世界に勧告した。まさに「だれの命も地球より重い」このことを実践的にすすめながら、世界の全ての人々が平和に、そして平等に生存する権利をお互いに保障することが必要であると言っている。そこには、思想・信条・立場を超えた話し合いと相互理解、協力と共同のみが求められる。つまり、非暴力の対極にある軍隊の存在は全く必要ではない。軍隊があれば必ず戦争をしなければならない。戦争をすれば必ず多くの市民が犠牲となる。戦争は最大の環境破壊である。二度と市民を戦渦に巻き込んではいならない。これが、「憲法九条」と「人間の命の等価を謳う絶対的生命観」との関係である。

5. 「草も木も人間も皆同じ」とする考えの克服

今日の環境の破壊が進行しているとき、「余りにも科学と技術が発達したがために、人間は自然を破壊してしまった」ので、これ以上の科学の発達を止めて自然の中で生活をし、他の生物とともに生きそして滅びていくべきであるという議論がされることがある。大変響きがよくさうだが、この自然主義的な見方は正しくない。人間が進化した今日においては、人間の存在を肯定し、環境に対する人間の責任のとり方を明確にすべきである。環境との調和によって人間が発達する途を選択しなければならない。そのためには、人間を「最上位」に置き、環境の管理を考えることである。また、ペットが死ぬか、あるいはヒマワリが枯れたときには泣き崩れて一週間も食事をしない子供が、祖母が死んだときには涙ひとつ流さなかった話を聞いたことがある。人間以外のものを愛することは、それを通じてより人間を愛する心を醸成することが目的である。ところが、最初の例を含めて、人間と他の生物を同列に扱うようになってくると、人間の価値が相対的に低くなり、生命の尊厳（＝人間の生命であり、他の生物は人間の生命を補完するものである）が軽んじられることになる。そうすると人間に対する関心が薄れ、人間の命に差を付ける考えになんら憤りを覚えず、むしろ差をつけることを当然視するようになり、結果として殆どゲーム化された戦争で誰が死んでも関係がないと考えるようになる。つまり、このような自然主義的生命観の行き着く先は人間の疎遠疎外でありそして蔑視である。これは憲法九条に敵対する生命観となる。この考え方は今日ではあらゆるところで目に付く。たとえば、環境問題においてもこの傾向が目立ち、全ての生物を（“・・・してあげる”などと持ち上げながら）平等に扱うことが進歩的であるように言う輩がなんと多いことであろうか！繰り返しになるが、この生命観こそが、「勝ち組」「負け組み」「差別化」などという言葉で代表される新自由主義市場経済万能論を創出し、「人間の命」に差をつける考えを意識的に導入することになるのである。結果的には、憲法九条を破壊する勢力を増やすことになる。「人間の命こそ何ものにも変えがたい絶対的なものである」ことを、教育現場や社会において合意する活動を強めなければならない。その生命観の構築が、「憲法九条」を護り育てることにつながる。

おわりに、「憲法九条」を守らなければ、生命の尊厳の確立は決して期待することができないことを確認しておきたい。

マルティン・ニーメラーの詩

ナチが共産主義者を襲ったとき、自分はやや不安になった。
けれども結局自分は共産主義者ではなかったので何もしなかった。

それからナチは社会主義者を攻撃した。自分の不安はやや増大した。
けれども依然として自分は社会主義者ではなかった。そこでやはり何もしなかった。

それから学校が、新聞が、ユダヤ教徒が、というふうにつぎつぎと攻撃の手が加わり、
そのたびに自分の不安は増したが、なおも何事も行わなかった。

さて、それからナチは教会を攻撃した。私は教会の人間であった。そこで自分は何事かをした。
しかし、そのときにはすでに手遅れであった。